現代俳句岡山

第 47 号

令和２年３月発行

おかやま県民文化祭参加
第二十四回岡山県現代俳句協会俳句大会

とき　令和元年十月二十日(日)
ところ　岡山県ゆうあいセンター

新元号令和となって初めての岡山県現代俳句協会の俳句大会が、爽やかな秋天のもと、三十六名の参加をえて開催された。開会に先立ち、恒例の当日句の席題五題が発表された。

定刻十一時開会。木村ゆきこ会長から「みなさまの交流を深める一日にしましょう」との挨拶。そして現代俳句協会中国地区連絡協議会会長に、花房八重子前会長が就任されたことが報告された。

続いて俳句大会の特選句・入選句の選評に移る。会長・副会長・顧問から俳論を交えての丁寧な選評が行われた。

十二時～十三時の昼食の時間に席題句の清記と選句が行われ、十三時から佐野由魚・秋岡宣子両副会長の司会進行で午後の部の俳句大会が開かれた。「おかやま県民文化祭賞」「岡山県知事賞」「岡山県議会議長賞」「岡山教育委員会教育長賞」さらに「岡山県現代俳句協会大会賞」「中国地区現代俳句協会会長賞」等の受賞作品について、参加者から活発な句評があり、各人の日頃の俳句に対する思いが述べられた。

ティータイムを挟んでの席題句の句会は、橋本幹夫・永禮宣子両幹事の司会進行で行われた。席題作句にもかかわらず、現代俳句ならではの佳句揃いで、参加者からの多様な意見が交わされた。結社や句歴を超えて、参加者全員発言の充実した大会となった。

表彰式は岸本順子幹事、土屋鋭喜事務局次長による入賞句の披講に続いて表彰式が行われ、木村会長から賞状並びに賞品が授与され、参加句友から拍手が贈られた。

おかやま県民文化祭参加事業として開催された俳句大会は、渋谷達磨副会長の閉会挨拶で全日程を終了した。

（土屋　鋭喜）

第二十四回　俳句大会入賞作品

【おかやま県民文化祭賞】

塗りつぶすなら夏やすみぜんぶ青　小西　瞬夏

【岡山県知事賞】

ぶらんこの少女は風になるところ　伊藤　舞

【岡山県教育委員会教育長賞】

げじげじを退治してより不整脈　鈴木　文子

【岡山県現代俳句大会賞】

噴水のとどくあたりが本気です　花房八重子

非通知を告げる着信終戦日　木村ゆきこ

箍嵌めてとんと叩いて秋立ちぬ　國富　柿方

畑仕事終える長さに蚊遣り香　古川　澄子

なんとなく父の間怖し蠅叩　天野　光暉

新涼や汽笛ひと山越えて来る　薄　和子

この道は流人街道夏あざみ　福島　閑雀

Tシャツで隣町へもあの世へも　永禮　宣子

【中国地区現代俳句協会会長賞】

現代俳句協会中国地区連絡協議会会長　花房八重子賞

ラムネ飲む地球はやっぱり青かった　國富　節子

山口県現代俳句協会会長　久行保徳賞

露草や死は折々に真近なる　清中　蒼風

広島県現代俳句協会会長　川崎益太郎賞

年寄の遊びの一つ水を打つ　天野　光暉

島根県現代俳句協会会長　月森游子賞

少年の手に逡巡の青レモン　秋岡　宣子

鳥取県現代俳句協会会長　植垣規雄賞

出産に少し間のあり夏帽子　渡辺　清美

岡山県現代俳句協会会長　木村ゆきこ賞

泉涌く地球のくすぐったいところ　永禮　宣子

【奨励賞】

11点　前田　宏

10点　花房　典子

9点　黒瀬　琢葉・土屋　鋭喜

8点　森田　景

当日句高点句

星月夜埴輪は眠る目を持たず　髙村　蔦青

秋の海もう飛べさうな読後かな　畦田　恵子

頬杖の片手に余る秋思かな　渋谷　達磨

ソプラノで鵙が鵙呼ぶ一軒家　國定　義明

星月夜母娘に緩き境界線　谷　久乃

お疲れの老医居眠る鵙日和　國富　節子

星月夜島のかたちに波寄せて　花房八重子

鵙の贄忘れ上手になりました　薄　和子

国よりもこの星よりも村秋思　土屋　鋭喜

あやとりの川が流れて星月夜　木村ゆきこ

鵙日和誰か来ないかなあと思ふ　片岡　陽子

秋の朝海に大きな月残り　加藤　正枝

云いたきことい尽したり星月夜　國富　柿方

手を上げてみたり跳んだり七五三　倉見　雯匝

歩を止めて少女に戻る星月夜　原田　好江

当日句席題

海・秋思・手・鵙・星月夜

講評

小西　瞬夏

☆泉涌く地球のくすぐったいところ　永禮　宣子

「くすぐったい」という身体感覚。人も動物も草木も、大地も、そして地球も。その「くすぐったい」というのは、きっと命の芽吹きでもあり、そこから水がこんこんと涌きだしてくるという。生命力にあふれ、またどこか「生きる」ということの不思議さ、面白さ、滑稽さをも表現している。アニミズムの一句。

☆星月夜母娘の緩き境界線　谷　久乃

星月夜が取り合わされている。もしかしたら、この母はもう夜空の星になっているのかもしれない。そうではなくても、距離感を感じさせながら、たしかな絆がある。密接な関係でありながらも、そこに境界線の存在を感じている。そのあたりの曖昧な感覚を「緩き」で納得させられる。

☆ひとつずつ天にかえして秋思かな　稲田マスミ

「秋思」という形のない季語に形が与えられた。まるでボールを天に投げるように、秋思は作者から取り出され、放り出される。思いにふけり、飲み込まれてしまうのではなく、それに形を与えることで取り出し、それを客観的に見ている作者がいる。「秋思」というのは、天からの授かりものだったのだ、と肩の荷がふっと軽くなる。

岡山県現代俳句協会句会 開催予定

とき　令和二年八月二十三日(日)
ところ　岡山県ゆうあいセンター

俳句に興味のある若い方の参加を促すと共に、会員の皆様に参加頂き新しい俳句のあり方を探求し、また会員の研鑽の場として句会を計画します。

本部においては図書館ポストの創設、青年部の勉強会等を通じて若い世代への俳句の拡大を図られています。岡山県においても新たな会員が増えるような魅力のある協会運営を考えています。

新しい試みとして参加者それぞれが忌憚のない意見が交わせるような句会の開催を計画しております。詳細等につきましては別途ご案内いたします。。

新会員候補者推薦のお願い

新会員候補者は、会員各位の個人推薦により選出されることになります。

会員のみなさまの周辺に、協会員に相応しい方がおられましたら、所定の「入会申込書」により、是非、ご推薦くださるようお願いいたします。

推薦いただいた方は、会長の承認を得て会員となっていただきます。

なお、「入会申込書」は随時受付けますが、入会日は入会手続き終了後となります。

現代俳句協会

列島春秋

地区別現代俳句歳時記
二〇二〇年掲載

一月　乗船の最後のひとり風花す　花房八重子
二月　寒施行にはかに兆すものの影　小西　瞬夏
三月　まほろばの吉備路の塔や雲雀東風　國富　節子
四月　斜張橋宙に浮かびし花ぐもり　古川　澄子
五月　牛まろぶ瀬戸の島々五月晴　久保田三千代
六月　田水張り結成棚田合唱団　福島　閑雀
七月　釜占ひの窓より煙半夏生　花房　典子
八月　熟桃や二人羽織のやうに食ふ　土屋　鋭喜
九月　表裏なき蒜山三座雁渡し　見手倉美砂子
十月　ふるさとのごんご祭にきんちゃいな　小山　明子
十一月　吉備だんご提げてえんやら冬うらら　橋本　幹夫
十二月　干支の牛並ぶ伊部の歳の市　岸本　順子

第二十回 吟行会
井山宝福寺

吟行記

とき　令和元年十一月二十日(日)
ところ　総社市井山宝福寺

真青の空に薄紅葉まっただ中の宝福寺界隈をゆっくり時間をかけて吟行した。宝福寺はその日は秋の特別拝観日になっており、寺院が全部開放され、抹茶席も設けられ菓子器は寺の古材で作られたものが使われていた。その後、句会は隣接する精進料理の店「金亀」で開催された。木村ゆきこ会長の「皆様で研鑽を深めあえる吟行会にしましょう」という挨拶の後、小西瞬夏幹事らによる句会が始まった。その句会は緊張感の中にものびやかに自由にみんなで創りあう吟行会となった。宝福寺は天台宗の古刹で鎌倉時代に当時の住職の鈍庵和尚が現代地に伽藍を建立、その後東福寺の玉渓和尚を迎えて開山し臨済禅宗に改宗したそうで、岡山県内でいち早く禅宗寺となった宝福寺は塔頭五十五末寺三〇〇余を数えた。有名な画僧雪舟がこの寺に入門し「涙で鼠を描いた」という逸話を残した室町時代にもこうした状況であったらしい。その後備中兵乱によりしばらく荒廃した。江戸時代には岡山藩、浅野藩の力添えもあり現代の姿となった。今は禅宗寺院として風格と静寂さ、秋は紅葉、春は新緑の趣がある寺である。三重塔（国指定重要文化財）は解体修理により南北朝時代に建立された事が明らかになった。県下では英田町の長福寺に次ぐ二番目に古い塔として国の重要文化財に指定され、総高一八・四七メートル、軒の出が深く軒先の反転もすらっとした姿の美しい塔である。梵鐘（県指定重要文化財）は刻まれた銘によると応仁二年熊山霊仏寺の梵鐘として鋳造されたものであり、何故宝福寺に移ったのは明らかでない。総高百十五センチでやや丈長であるが鋳上がりは美しく、室町時代の特徴をよく備えた名鐘で、かつては除夜の鐘として全国に放送された。三重塔に隣接して雪舟の顕彰碑、詩人なんばみちこ夫妻の詩碑、満谷国四郎の碑、柿青句碑がある。

（國富節子）

主な作品

白障子達磨大師の目の力　薄　和子
森閑と寺は冬芽の音を吐く　片岡　陽子
空真青紅葉浄土の宝福寺　応本　義朗
方丈の大鏡より冬に入る　小西　瞬夏
薄目して黄葉紅葉に深入りす　國富　柿方
天井の龍が動いた小春の日　鈴木　文子
塔しのぐものなき空や冬に入る　國富　節子
禅寺の忘れ路の塔初もみじ　右手　敦子
縛らるる雪舟の頭を撫で小春　花房　典子
句碑と詩碑いだく古刹や小春の日　木村ゆきこ
雪舟の紅葉日和をしばられて　稲田マスミ
薄紅葉透かして光る柿青句碑　前田　宏
山門で脱ぐ新しき冬帽子　永禮　宣子
方丈にほつと身を置く小春かな　秋岡　宣子
秋冷の方丈に鳴る受信音　佐野　由魚
どの顔もしばし惚けて見る紅葉　渋谷　達磨
秋高し紅葉清虚無盡藏　竹内　享佑
聖鶴の書に冬の日のリズムかな　土屋　鋭喜
秋天や枯山水の新オブジェ　保田　紺屋
紅葉山見え隠れする古刹かな　亀山　邦子
わが町に句友集ふや紅葉時　池上栄実子
照紅葉じっと我慢のカメラマン　福島　閑雀
高僧の寺の静寂秋深し　見手倉美砂子
秋の蝶ことばとどめおくあそび　藤原美恵子

会員句集紹介

句集　生きる　万波照世

・令和元年十月三十日発行

ある朝目覚めたとき「私には俳句がある！」と思ったことは、今でも鮮明に覚えており、年賀状でも多くの方に「俳句を糧としています」と書き添えたものだ。

そうした日々の中で作り続けてきた俳句をまとめたものが、この句集「生きる」である。七年間、正に私は俳句と共に生きてきた。俳句を作ることによって生きることができたものと思っている。

郵便の来ぬ日花芽をみつけたり
犬ふぐり咲く凹凸のもぐら道
突つかれて転げても瑠璃龍の玉

句集　一対　小西瞬夏

・令和元年十二月一日発行

第一句集「めくる」より七年が過ぎ、第二句集「一対」をまとめることができた。俳句があったからこそ、この激動の七年あまりを面白がってこられたようにも思える。

いちまいは蝶いちまいは光かな
少年の唇月光の匂ひせむ
水滴になりさう鞦韆つよく漕ぐ
囀りの中いきいきと背きけり
ほゝづきを鳴らしてをはる密か事

会員受賞作品

第五十六回現代俳句全国大会

令和元年十一月十六日

佳作入選

手鏡に禁令の蝶かくまへり　小西　瞬夏

第十四回岡山県俳人会俳句大会

令和元年九月二十九日

岡山県議会議長賞

蛸壺のひとつひとつに春の闇　花房　典子

岡山県俳句大会賞

未完とは自由な未来青りんご　久保田三千代

岡山県俳句大会秀逸賞

風薫る卒寿の人のイヤリング　黒瀬　紘子

尻振って登る自転車雲の峰　伊藤　昇

第三十六回岡山県俳句作家協会俳句大会

令和二年三月

岡山県俳句作家協会賞

「お父さんお茶にしませう」小鳥くる　光吉　高子

道問うて国を聞かれし秋遍路　古川　麦子

補聴器に溢るる鳥語露しぐれ　天野　光暉

諸　家　近　詠

小西　瞬夏

末黒野を行くちちははに影がない
大嘘また太陽の動きだす
キリトリセンヨリキリトル春の空
父の背春満月がついてゐる
髪少し切り春濤を遠くせり

小松原陽子

写真館光と影と藪柑子
風花の街パスポート申請す
寒紅梅尾道の坂照り曇り
バス停で盲導犬と待つ雨水
船旅の終わりを告げよ冬かもめ

小山　明子

蕗のとう地面にっこり笑いだす
蕗のとうふくらむ日々の光りあり
紅梅や絵筆をすすぐ水の音
束ねるとなく剪定の枝置かれ
ていねいに星散らしたる二月かな

佐藤　千恵

初空へガウディの塔またのびて
冬紅葉一枚ベンチの予約券
とめどなき恋の追憶ぼたん雪
五つ六つあけびあくびす島の昼
二十五時孤独引きよす鉦叩

佐野　由魚

春風や先頭バッター三振す
ネットワークから逃げているとろろ汁
春の岬キリスト教史忘れける
難しきメルロ・ポンティ春の空
カニ味噌吸う底の景色が見えてくる

繁森　明美

蕗味噌に舌鼓打つ八十路かな
山茱萸咲く静けき家の安否問ふ
猫柳想い出と共に壺に活け
雛菓子に老もほころぶ午後三時
菊根分終えて大空仰ぎ見る

渋谷　達磨

探梅や衍のとどく手前まで
下萌を踏んで旅籠の客となり
春風に棟梁一人棟に立つ
路地裏へ老婆分け入る朧月
野に遊ぶ老人のいて我も居て

薄　和子

丁場湖の底まで透けて風の色
ツートンカラーのフェリー近づく小春凪
いつまでもポスト離れぬ冬の蝶
薄氷やこれより先も鍵持たず
水音に人の声たし芹青む

鈴木　文子

改元の報にぐんぐん松の芯
歩むたび音清らかに遍路鈴
ロボットに気遣はれゐる夏の風邪
天井の龍が動いた小春の日
大吉の多きみくじや神還る

髙村　蔦青

一木に始まる目覚め笹子鳴く
ものの芽や木にも水にも音生まる
試歩の径此のあたたかさ何処(いずく)より
鳥に唄人に詩あり青き踏む
草萌ゆる棚田百枚百の畦

竹内　亨佑

焼け跡に上った月に罪はない
月上る万歳した人させた人
十三夜陶師泥縄綯っており
マスクマスク原始はみんな菌だった
初旅や相客とすぐ話せたり

谷　久乃

おしくらまんじゅうこの頃涙もろくなり
おじさんのくしゃみ地球を揺るがして
あの人もシニア割引春ショール
ローマ字の道案内や椿東風
ひひなの日蔵の引戸の重たくて

諸　家　近　詠

塚原　恒子

木洩れ日に咲く参道の梅二輪
とんとんと家事の進む日フリージア
葱坊主医者にもなれず教師にも
レモンの香つけしおしぼり春の風
音もなく夕日差し込む雛の壇

土屋　鋭喜

百千鳥もう耐へられぬ無観客
彼の人とぎつたんばつこん黄砂降る
四温光日曜画家の陣取りぬ
名園の客はまばらに西行忌
猫の子や餅は餅屋の甘えやう

豊田　級衣

次の世も二人の暮らし合歓の花
丁寧にたたむ制服今日の月
地方紙に紫のぞく秋茄子
疑問符を抱きてさまよう秋野かな
ありがとうと一言のみの賀状来る

永井麻紀子

枯芝を走るピンクのスニーカー
鬼は外犬には団子ひとつやり
旅行社のサイト巡りの雨水かな
春キャベツドレッシングは白にして
桜東風スクールゾーンを通り抜け

長尾裕美子

天上に還らんと瀧落ちにけり
四次元に朧を加へ五劫なり
空海を友の如くに花守は
花の宴有象無象に穀象も
わたしが元気なら寒禽も元気

中川也寸子

立春や豆の転がる介護バス
春の雨ギターは調弦待っている
雨止みて松に赤札植木市
初蝶やワンピースも白リボンの子
待春のさざ波立てる青磁皿

永留　迪代

廃線のプラットホーム梅真白
春の旅かばんにシップとテーピング
春暁や下津井沖の漁舟の帆
空へ青空へ立ち漕ぎのブランコ
鰆一匹散らし寿司でも作ろうか

永禮　宣子

啓蟄やまた蛇として在る覚悟
浅春やほどけては巻く蛇の夢
風吹けば空をくすぐり猫じゃらし
残心を振りきる高さ鳥渡る
山椒魚ペテルギウスを看取るまで

難波　正夫

メモるとは忘れることか年の暮
また一軒欠けて八軒とんど焚く
立春の海老の天ぷら饂飩かな
住み馴れし峡や睦月の空の下
不自由も自由のひとつ牡丹の芽

難波　正範

令和をもはがれ漆器の雑煮椀
ふつくらと光る黒豆節料理
手袋の親指に穴福寿草
二月尽影に引かるるまま歩む
啓蟄や小振りで軽き靴ピンク

沼本　養卯

春燐母の日本語わかる猫
うららかや猫乗せてゆく猫車
うららかや散歩は犬・主・猫の順
カステラに歓喜する猫芥子の花
青葉風ピクリと動く猫の耳

橋本　幹夫

初空や薩摩隼人の一番湯
清流の声は穂高の早春賦
早春の風につかまり立つ嬰児
公魚や地球の裏はカーニバル
あたたかや鹿の擦寄る厳島

令和二年度 総会のご案内

日時　令和二年四月十九日（日）
　　十一時～十二時
会場　岡山県ゆうあいセンター
　　（きらめきプラザ）大会議室
　　岡山市北区南方二丁目十三－一
　　（旧国立病院跡）駐車場有り
会費　千円（昼食費他）

議事
①平成三十一年度事業報告・会計報告
②会計監査報告
③令和二年度事業計画案・予算案
④その他

報告・連絡事項
①新会員の紹介
②第三十八回中国地区現代俳句大会・
　総会（広島県）
③その他

◇総会・昼食の後、十三時～十五時まで持ち寄り句会を開きます。
投句用紙を同封しています。

第三十八回 中国地区現代俳句大会ご案内

とき　令和二年六月十四日（日）～
　　十五日（月）
ところ　広島市「ホテルセンチュリー21」
　　広島市南区的場町一－一－二五
　　TEL（〇八二）二六三－三一一一
講演会講師　神野紗希先生
　　（現代俳句協会幹事・青年部長）
会費　一万七千円
　　（宿泊・懇親会・朝食含む）

令和二年度 行事予定

○総会
四月十九日（日）
岡山県ゆうあいセンター

○句会
八月二十三日（日）
岡山県ゆうあいセンター

○第二十五回現代俳句大会
十一月一日（日）（予定）
岡山県ゆうあいセンター

○第二十一回吟行会
十一月十五日（日）
足守地区（岡山市）

ご逝去 心よりご冥福をお祈り申し上げます。
毛利廣子様　令和元年十月五日

事務局・編集部だより

▽第二十四回俳句大会、井山宝福寺の吟行会は会員の皆様のご協力により円滑に進めることができました。特に吟行会におきましては役員以外の会員の方にも積極的に協力を頂き会員一同が一つの輪になったような吟行会になりました。
先般ご案内の令和二年度総会・持寄り句会には、お誘い合わせのご参加をお待ちしております。
▽会報四十七号をお届けします。ご多用中、原稿依頼にご協力有難うございました。
（前田　宏）
▽令和二年度会員の振込用紙を同封しました。よろしくお願いします。前年度分まで未納の方は合わせてお振込みをお願いします。
（薄　和子）

会報他受贈深謝
各県、各地区より会報、句集等、贈呈いただき有難くお礼申し上げます。

現代俳句岡山・第四十七号
令和二年三月三十一日発行
発行責任者　木村ゆきこ
発行所　岡山県現代俳句協会
編集人　前田　宏
事務局　〒七〇〇－〇九七五
　　岡山市北区今八－二－二八－三〇一　前田宏方
TEL・FAX（〇八六）二四六－〇七六二